



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	プレゼンテーションの電子資料から見た問題点とは何か : 日本語母語話者及び外国人日本語学習者の共通点と相違点(fulltext)
Author(s)	許,夏玲
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 68(2): 487-492
Issue Date	2017-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/147020
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

プレゼンテーションの電子資料から見た問題点とは何か

—— 日本語母語話者及び外国人日本語学習者の共通点と相違点 ——

許 夏 玲*

留学生センター

(2016年9月13日受理)

1. はじめに

IT (Information Technology 「情報技術」) やICT (Information Communication Technology 「情報通信技術」) とは、ここ十数年ぐらい前から日本で広まりつつある言葉である。近年、ICTという言葉が流行っており、学校教育でも活用されることが注目されている。教育現場では、ICTと言え、まず思い浮かぶのは、デジタル教材、電子黒板、遠隔通信教育などのものが挙げられる。

筆者は、かつて留学生対象の日本語教育に関して、授業中のパワーポイント資料による中上級学習者のノートテイキングに関する調査研究を行ったことがある(許2014)。中上級学習者を対象とした調査アンケートを行った結果、学習者の母国大学の授業形式に関しては、プリント配布や板書のほうが最も多く、パワーポイントによる授業はその半分となり、パワーポイント資料は、授業ではそれほど用いられていないことがわかった。そのほか、授業内容のノートテイキングに関しては、約半分の回答者はノートテイキングに慣れていないという結果が得られた。

書くという行為には、「内容を理解し記録する」「得られた知識を整理整頓する」「大切な情報を的確に見出して伝達する」という3つの言語の処理が含まれていると考えられる。また、ノートを作る目的に関して、高濱・持山(2010)では「残すため」「覚えるため」「まとめるため」の3つが挙げられている。言い換えれば、ノートテイキングは、学習者の授業内容に対する一種のアウトプットであると言えよう。

前述の「内容の理解」「知識の整理整頓」「大切な情

報の伝達」という点においては、ノートテイクとパワーポイント資料の作成が共通していると考えられる。なぜパワーポイント資料の作成を取り上げる必要があるかと言え、近年ICTの活用が呼びかけられている中で、ビジネス企業のみでなく、教育現場でもしばしばパワーポイントを用いたプレゼンテーションが行われており、如何にパワーポイント資料を活用して情報伝達を行うかが教育現場の課題の一つでもあると言えよう。

そこで、本研究では、日本語母語話者及び外国人学習者のプレゼンテーション用のパワーポイント資料をもとに考察し、両者の資料の作成にあたっての特徴や相違点を分析し、また改善すべきところを検討することにより、パワーポイントによるプレゼンテーション資料の作成への効果的な指導法を提案することができ、教育の現場に役立てることが期待できると考えている。

2. 研究対象と方法

本研究では、2014年度春学期と秋学期、2015年度春学期及び2016年春学期の期間中、日本語母語話者及び上級日本語学習者(両者とも大学院レベル)、計41名分のプレゼンテーション用のパワーポイント資料をもとに考察した。

外国人学習者の個人情報 considering した上、国籍を明記せず、漢字圏及び非漢字圏のみを表記することにした。

パワーポイント資料の作成者の情報は以下の通りである。本研究では、収集したデータの中で男女別によ

* 東京学芸大学 留学生センター (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

る大差が見られなかったため、男女別の内訳人数を表記しないことにした。

表1 パワーポイント資料の作成者の情報

年度・学期	作成者	人数
2014・春	日本語母語話者	4
	漢字圏学習者	3
	非漢字圏学習者	2
2014・秋	日本語母語話者	3
	漢字圏学習者	1
	非漢字圏学習者	2
2015・春	日本語母語話者	8
	漢字圏学習者	11
	非漢字圏学習者	2
2016・春	漢字圏学習者	3
	非漢字圏学習者	2
合計		41

研究方法としては、日本語母語話者及び外国人学習者によって作成されたプレゼンテーション用のパワーポイント資料（各発表者の発表時間は約15分～20分）をもとに考察し、特に見出しの書き方、内容の構成、強調、図表、スライドの文字サイズ、参考文献、末尾挨拶に注目し、両者の資料作成にあたっての特徴や相違点などを分析する。

3. 研究結果

3. 1 見出し

今回収集した41名分のパワーポイント資料のスライドの見出し（スライドのタイトル）を見ると、半数を超えた27名分のスライドの見出しの見分けがはっきりしていないことがわかった。作成者の内訳は、日本語母語話者15名中11名、漢字圏学習者18名中11名と非漢字圏学習者8名中5名である。見出しの見分けの主な問題点としては、大小見出しの見分けがつかないことが挙げられる。

例えば、次のようなものがある（母語話者0702）。1枚目のスライドは「題目」、次いで2枚目～5枚目のスライドの見出しは全部「1-1 研究の背景」「1-2 研究の背景」「1-3 研究の背景」「1-4 研究の背景」「1-5 研究の背景」となっている。「研究の背景」には、主に先行研究の紹介や重点が挙げられている。外国人学習者の場合（学習者0726）でも、上述と同

じことが観察された。1枚目のスライドは「題目」、2枚目～6枚目のスライドは「研究動機・背景」となっている。それぞれの内容には、先行研究の著者名（出版年）とそれらの紹介が書かれている。そして、研究背景の部分のみでなく、中では中心部のスライドで「意味的特徴の観点から」「意味的特徴の観点から」が2枚連続して並べられているものもある。それぞれのスライドには先行研究の紹介が挙げられている。

上述の見出しの見分け方のみでなく、見出しの番号表記が欠けている場合（母語話者0713）もある。3枚目のスライドに「1. 先行研究」が表示されてから、4枚目のスライドから6枚目のスライドまでは、見出しがついておらず、内容は先行研究の著者名（出版年）とそれらの内容の紹介を中黒点で並べられている。

他の例では、5枚目のスライドは「先行研究」とし、6枚目のスライド～14枚のスライドはその先行研究の紹介となっている。6枚目には先行研究の著者名（出版年）とその主な内容が挙げられており、7枚目のスライド～11枚目のスライドには、それぞれ①②③④⑤の先行研究の分類とその内容が書かれている。12枚目～14枚目は、もう一つの先行研究の紹介をなされた（学習者0724）。こうしたスライドの区切りがはっきりしていないものが3件あった。

前述の見出しに関する問題点は、母語話者、外国人学習者（漢字圏も非漢字圏も）を問わず、作成されたパワーポイント資料において観察された。

本来なら、スライドに資料内容を簡潔にまとめ、要点を箇条書きで示すのが望ましいが、資料内容をスライドに詰めすぎると上述のようなことが起こるだろう。上述の「研究背景」が何枚も続いている場合は、1枚のスライドを「1. 研究背景」とし、それ以降のスライドを「1. 1 海外の日本語学習者数」、「1. 2 日本語学習者の学習動機」などといった見出しの書き方も考えられる。

そのほか、スライドの上段に小見出し（「1. 1 海外の日本語学習者数」）を提示した上、同じスライドの右上に大見出し（「1. 研究背景」）を小さめに記すという方法もある。

3. 2 スライドの構成

今回収集した資料に基づき、スライドの構成を具体的な発表内容そのものではなく、主に形式面からスライドを1枚ずつ考察した。

一般に発表用のものの幅は25.4cm、高さは19.5cmであるため、スライドの1枚の書き込みのスペースが

限られている。文章と違って、スライドには長い文章の書き込みより、重点のみの箇条書きが読みやすく好まれるだろう。スペースの余裕を持って資料を作成する場合は、図1のように、横長(幅:33.86cm, 高さ:19.05cm)のスライドをお勧めしたい。

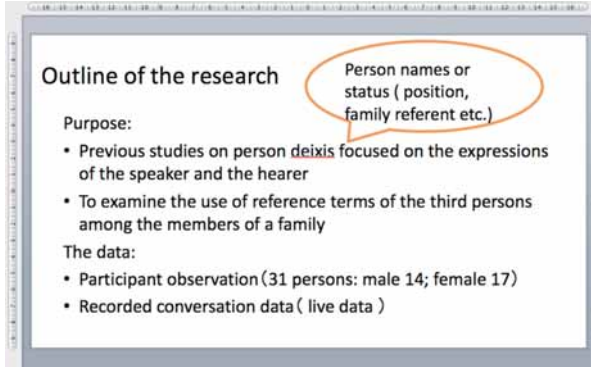


図1 スライドの1例

今回のデータを見ると、日本語母語話者では比較的に重点をまとめ、箇条書きに工夫されたものが多かった(15名中10名)。しかし一方、外国人学習者では第二言語である日本語の文章を重点的に、かつ簡潔に要約することには困難が生じると見られる。その典型例として文章化が挙げられる(26名中19名)。文章化とは、学習者が参考文献を引用する際、その中の一部の引用文章をスライドに写してしまうことである。文章のほか、短文レベルのものも多い。通常、箇条書きで書く場合は、キーワードやフレーズ、延いては文節レベルのものが用いられやすい。

文章化になりがちなスライド資料は、なぜ好ましくないのかと言えば、本来発表者の話を聞きながら、スライド資料を読むのに情報処理の面において負担がかかると考えられるためである。発表者が話さないわけにはいかない状況の中で、最終的にはスライドの資料内容を簡潔に提示することで聞き手側が内容を読み取りやすくなり、わかりやすくなるだろうと考えられる。

3.3 強調

上述の文章化になりがちなスライド資料では、要点をまとめるほか、様々な方法で要点を強調することができる。今回のデータでは、色、下線、文字のサイズ、ボールド、色つき枠などの強調の手段が多く用いられたことがわかる(41名中30名)。なお、内容との関連づけの図や絵を用いてインパクトを与える工夫も見られた。しかし、色とは言え、どの色でも内容が目立って見えるとは限らない。中では、文字が水色や薄

い色の色系で表示されている場合は、後方の席から見にくいことがある。また、色によって見えにくい場合は、文字の大きさ、ボールド、下線や枠付きなどを工夫するといった方法もある。

3.4 図表

前述のように、一般に発表用のスライドの幅は25.4cm、高さは19.5cmであるため、スライドの1枚の書き込みのスペースが限られている。細かい数字やデータの書かれている図表は、できれば1枚のスライドに一つの図や表を入れるのが望ましいと思う。1枚のスライドにも表のすべてのデータが収まらない場合は、項目ごとに表を小さく分解して何枚かのスライドに分けて提示するか、表のデータの中から相手に伝えようとする最も重要なデータのみを抽出してまとめて1枚のスライドに収まるように提示するか、表のデータから得られた結果のみをスライドに書き込み、該当の表を添付資料として別途配布するなど、様々な方法が考えられる。

なお、図表の文字が小さく見える場合(後方の席から見やすい文字サイズは32ポイント前後)は、次の図2のように、パワーポイントのオブジェクトパレットとアニメーション機能を活用して該当箇所のデータや文字のみを拡大しポップアップして見せることができる。

属性	すこい	つばい	みだいな	じなない	まか	なんか	でしよ	一め	よいうか
MORE	10	3	2	7	1	0	0	0	0
CUTIE	15	13	0	9	0	0	0	0	0
VERY	2	3	3	0	0	0	2	0	0
VIVI	7	14	2	1	0	0	0	0	0
INRED	7	2	0	1	0	0	0	0	0
CROSS ANT	1	1	1	8	7	1	3	0	1
合計	42	36	8	26	8	1	3	0	1
TINL BOYS	2	0	0	0	0	0	0	0	0
LOMO	3	0	0	0	0	0	0	0	0
LEON	3	0	0	1	0	0	0	0	0
MEN'S NON-NO	25	1	1	9	0	0	0	3	3
合計	33	1	1	9	0	0	0	3	3

図2 アニメーション機能の活用

3.5 スライドの文字

某国際大会では、発表用のポスターの文字サイズが32ポイントに設定されているという事例があった。パワーポイント資料のスライドをスクリーンに投影し、文字が大きめに見えるとしても、32ポイント前後を目安にするといいと思う。

今回の収集した41名分のパワーポイント資料を見

ると、スライドの見出しの文字サイズと本文の文字サイズは次のようにまとめられる。

表2 見出しと本文の文字サイズ

*同じ作成者である。

作成者	見出し	本文 (平均)
日本語母語話者 (女)	44	30
日本語母語話者 (女)	44	29
*日本語母語話者 (男)	44	27
日本語母語話者 (女)	44	32
日本語母語話者 (男)	43	32
日本語母語話者 (女)	40	24
*日本語母語話者 (女)	46	36
**日本語母語話者 (女)	40	28
*日本語母語話者 (男)	44	32
日本語母語話者 (男)	44	32
*日本語母語話者 (女)	36	24
日本語母語話者 (女)	32	24
**日本語母語話者 (女)	48	40
日本語母語話者 (男)	30	24
日本語母語話者 (女)	50	22
*非漢字圏学習者 (女)	28	24
**非漢字圏学習者 (女)	28	24
*非漢字圏学習者 (女)	32	24
非漢字圏学習者 (男)	36	20
**非漢字圏学習者 (女)	36	28
非漢字圏学習者 (女)	44	32
非漢字圏学習者 (男)	44	30
非漢字圏学習者 (女)	48	28
漢字圏学習者 (女)	38	21
漢字圏学習者 (女)	40	35
*漢字圏学習者 (女)	32	32
漢字圏学習者 (女)	18	20
**漢字圏学習者 (女)	36	27
漢字圏学習者 (女)	28	22
**漢字圏学習者 (女)	19	28
漢字圏学習者 (女)	44	32
*漢字圏学習者 (女)	28	28
漢字圏学習者 (女)	36	32
漢字圏学習者 (女)	40	24
漢字圏学習者 (女)	44	24
漢字圏学習者 (女)	36	22

漢字圏学習者 (女)	36	24
***漢字圏学習者 (女)	28	28
漢字圏学習者 (男)	20	18
***漢字圏学習者 (女)	36	20
漢字圏学習者 (女)	32	28

上記の表に示している本文の文字サイズを見ると、日本語母語話者では、1スライドに多く書き込まれている場合は、比較的に文字サイズが小さく、24ポイントになっている(図3の上段の文字)。しかし、文字サイズを28ポイント(図3の下段の文字)に直しても内容が収まる場合があるため、やや大きめの28ポイントのほうが読みやすくなると思う。そのほか、フォントの選択によって与えられる視覚的な印象も違ってくる。

研究動機と目的

研究動機と目的

図3 文字サイズとフォントの違い

なお、スライドに内容を詰めすぎると、文字サイズもかなり小さくなり、22ポイントでは後方の席から見えにくくなるだろう。内容を項目によって何枚かのスライドに分けて提示すると、内容が詰めすぎず読みやすくなると思う。外国人学習者では、26名中19名の本文の文字サイズが30ポイント以下になっている。前述の3.2内容構成でも述べられたように、スライドの本文の文字サイズが文章化の問題に起因していると考えている。

3.6 参考文献

専門分野によって参考文献の書き方も違ってくる。日本語教育の分野を例に挙げると、文献と文献を区切るため、中黒点や2行目から1文字のスペースを下げるといった方法が用いられることが多い(図4)。

- (1)石田敏子 (2010)「講義研究—表現から理解へ」
『講義の談話の表現と理解』, くろしお出版, pp. 1-10
- (2)岩下智彦 (2012)「ノートテイキングからみる講義の理解過程—講義理解のための授業の枠組み形成を目的として—」『2012年度日本語教育学会春期大会予稿集』, pp. 145-150

図4 参考文献の事例

今回収集した資料では、参考文献を列挙する際、前述のような文献の書き方が見られなかった(41名中13名；内訳日本語学習者10名, 日本語母語話者3名)。

3. 7 末尾挨拶

プレゼンテーションが終わった時点で多くの場合は発表者が「ご静聴ありがとうございました」と挨拶をして話を締め括る。今回収集した資料では、41名中26名の資料作成者がスライドの最後にこのような末尾挨拶を提示した。公の場でのプレゼンテーションではないためか、授業の一環としての研究報告と考えられたためか、発表資料に末尾挨拶を入れなかったものもあった。

なお、日本語学習者の末尾挨拶では、「ご静聴どうもありがとうございます。」の現在形(2名)と「ご静聴、どうもありがとうございました。」の語句間の点入り(5名)が多く見られた。現在形が用いられたのは、中国語の「谢谢」や英語の“Thank you”から見られる母語による影響であると考えられる。一方、「ご静聴、どうもありがとうございました。」の点入りは、「ご静聴いただき、どうもありがとうございました。」の縮約形と考えられたためか、「事情、了解しました。」の砕けた書き方と考えられたためか、定かではない。

そのほか、「ありがとうございました!」のような末尾挨拶にびっくりマーク付きの表記もあった(日本

語学習者5名, 日本語母語話者1名)。若者のSNS上の表現として記号が多く用いられていることから感謝の気持ちを込めた意を表すために用いられたと考えられる。

4. まとめと今後の課題

今回収集した41名分のパワーポイント・ソフトウェアで作成された発表資料を見ると、日本語母語話者と日本語学習者を問わず、スライドの見出し(タイトル)の見分けがはっきりしていないことの多いことがわかった。なお、作成者がコンピューター上で資料を作成する際、デスクトップで表示されている資料までの距離が僅か20cm~30cmしかないため、プレゼンテーション時にスクリーンに投影されている資料の文字サイズやフォントの見やすさという点を往々にして見落としてしまうことがある。そのほか、日本語学習者では、資料内容の要点の箇条書きというより文献の引用による文章化の問題が挙げられる。プレゼンテーションのための日本語の用語は、日常の会話表現と違うし、表現のニュアンスの微妙な差があるため、これらの説明及びプレゼンテーションのための練習と指導は、ゼミナールでしかできないと思う。

今回は、主に単発的に作成者の1回分の資料を収集して扱ったため(同じ作成者が間を置いて2回資料を作成した場合もあるが、数名しかいない)、資料作成のための助言や指導を受ける前と受けた後の違いや変化は検証できなかった。今後の課題としたい。

参考文献

- 高浜正伸・持山泰三 (2010)『子どもに教えてあげたいノートの取り方—成績が伸びる子の勉強術』実務教育出版
- 許夏玲 (2014)「日本語教育におけるノートテイキングの意義：学習者側と教師側の観点から」東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 65 (2) : 517-525

プレゼンテーションの電子資料から見た問題点とは何か
—— 日本語母語話者及び外国人日本語学習者の共通点と相違点 ——

What Did We See from the Powerpoint Presentation Materials ? :

The Common Points and the Differences between
the Japanese Natives and the Advanced Japanese Learners

許 夏 玲*

Harling HUI

留学生センター

Abstract

Since the use of ICT has spread not only to business but also to the education field in recent years, the use of powerpoint made materials as a communication strategy in presentation is well worth notice. This paper examines the features, the common points and the differences of the powerpoint made presentation materials of 15 Japanese natives and 26 advanced Japanese learners. Throughout the observation of the data, I also suggest some methods of instructions on making the presentation materials.

Keywords: presentation, powerpoint files, Japanese natives, advanced Japanese learners, methods of instructions

International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 近年ICTの活用を呼びかけられている中で、ビジネス企業のみでなく、教育現場でもしばしばパワーポイントを用いたプレゼンテーションが行われており、如何にパワーポイントを活用して情報伝達を行うかが教育現場の課題の一つでもあると言えよう。

本研究では、日本語母語話者及び外国人学習者のプレゼンテーション用のパワーポイント資料をもとに考察し、両者の資料の作成にあたっての特徴や相違点を分析し、また改善すべきところを検討することにより、パワーポイントによるプレゼンテーション資料の作成への効果的な指導法を提案することができ、教育の現場に役立てることが期待できると考えている。

キーワード: プレゼンテーション, パワーポイント資料, 日本語母語話者, 外国人学習者, 指導法

* Tokyo Gakugei University International Student Exchang Center (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)